

先週の水曜日から、大齋節に入りました。

私たちは昨年末のクリスマスを起点にして、イエス様の生涯をたどりながら福音書に従って学んでまいりました。しかし、今日からは、クリスマスではなく、もう一つのお祝い日である、イースターを起点にした暦に従い、イエス様の受難と復活を意識しながら、学んでゆくことになります。

大齋節と、私たち聖公会は呼んでいますが、カトリックや他のプロテスタント教会は、四旬節と呼ぶのが一般的になってきました。四旬とは、40日という意味です。一ヶ月を3つに分けた時、上旬、中旬、下旬と呼んでいるのは、最初の10日間、真ん中の10日間、最後の10日間ということですね。今年の大齋節は、3月5日水曜日から、4月19日・土曜日。イースターの前日まで、数えると46日あります。しかし、日曜日は、イエス様の復活されたお祝いですから、それは数えないで、40日あるわけです。

この期間は、イエス様が伝道活動に入られる前、40日間荒れ野で修行をされたことと、活動の最後、エルサレムにロバに乗って入られてから、十字架にかけられ、復活されるという1週間の出来事を黙想するために用いられています。昔は、イエス様の復活に合わせて、洗礼を受ける人の洗礼準備期間ということになっていましたが、それを教会員みんなが毎年体験しようということになって、定着して行きました。

でも、苦しい修行というのは、特に食べ物など、ガマンすることが多いので、皆さんよくご存知のように、その前に大騒ぎをして楽しもう、と今年も、南米などカトリックの強い国では、カーニバルをしていました。日本語では、カーニバルを「謝肉祭」、つまり肉に感謝する祭り、と訳され、そのあとは、ひっそりとイースターまで過ごすわけです。

さて、今日の福音書では、イエス様が荒れ野で40日間断食されたあと、悪魔から3つの誘惑を受けられたことが記されていました。しかし、細かく読んでゆくと、わたしたちが日ごろ覚えている順番ではなく、2番目と3番目が入れ代わっていることに気づきます。悪魔は世界の国々を見せて、自分を拝むなら、それらを全部お前にやろう、という話は、最後であって、その前に、エルサレムの神殿の頂上から、飛び降りてみる、天使が助けてくれるぞ、と誘惑したのではなかったか、と思うのです。

どうも、わたしたちは、マタイに出てくる荒野の誘惑の方を頭に描き、それを扱った映画などの影響で、常識ができてしまっているようです。しかし、マタイによる福音書と、今年読んでいるルカによる福音書では、イエス様の誕生の物語が、恐ろしい子どもを殺すマタイの話と、エルサレムの宮参りの平和なルカの話というふうに違いがあるのと同様に、この誘惑の物語でも、それぞれの編集した目的にあわせて、入れ替えたのではないかと、思われます。

マタイによる福音書は、旧約聖書を知っているユダヤ人に対して、イエス様を紹介する目的がありました。ですから、誕生した時も、ヘロデ王の迫害を逃れて、殺されないように、エジプトへ逃げた話が展開されました。モーセが誕生した時、小さな子どもが殺される話と似ているんですね。

そして、イエス様の荒れ野での40日にわたる修行と誘惑の話も、モーセたちの荒れ野での40年の放浪と、そこで起こってくる、人々の争い。最初に、まず食べ物が無い、ということで不平が出ると、天からマナを降させます。これがイエス様の「石をパンに変えてみろ。」という話に結びつきますし、そのうち、もう引き返すこともできない旅の途中、今度は飲み水に困って争いが起こります。そして、モーセは岩を叩いて水を出すのですが、これは、パンが無いことのような、ひもじさの問題ではありませんでした。

出エジプト記の17章9節に「彼（モーセ）は、その場所をマサ（試し）とメリバ（争い）と名付けた。イスラエルの人々が「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」と言って、モーセと争い、主を試したからである。」と書いています。神様がいて、いつも助けてくれているかどうか、それを知りたくて、起こった出来事だったのですね。これは、神殿の上から飛び降りてみる、という悪魔の誘惑の言葉と対応します。イエス様が「あなたの神である主を試してはならない」と答えられたのも、この出エジプトの出来事と関連しているのです。

そして、最後が、モーセがシナイ山で十戒を授かっている間に、人々は金の子牛の偶像を作って、それを神様としてしまったお話が出てきます。出エジプトのクライマックスですね。主を神様としないで、神ではないものを神としてしまう、偶像崇拜の罪がそこにありますが、それが、マタイでは、最後に出てくる、この世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、自分を拝めば、それを与えてやる、という話になったのでしょうか。

さて、そういうわけで、本来はモーセたちの出エジプトの出来事と関連があったのですが、ルカによる福音書が、順番を入れ替えたのは、どうしてか。いろいろ理由があると思われますが、わたしが考えますのには、最初の、石をパンに変えることと、2番目に、世界の国々を見せることを並べることで、誘惑の意味を対比させようとしたのではないかと、思います。

第一のものは、貧しさから来る誘惑。第二のものは、豊かさから来る誘惑です。このルカによる福音書は、1章でマリアの賛歌というのが登場し、神様は、身分の低いマリアに目を留められた、ということを感じ、「権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」というふうに、神様にあつては、立場の逆転が起こる、ということを語るところから始まります。また、6章では、イエス様の4つの幸福と4つの不幸を対比する形で語られる説教が用意されています。ですから、それと同様に、この誘惑でも、飢えている者が、その貧しさのために信仰を失うことがあるかと思えば、豊かな富のために、信仰から遠のくこともある、と語っているのではないのでしょうか。

そして、最後は、その神様を自分のために利用してやろう、という誘惑に陥る、一見熱心に見える人が、実は神様に仕えるのではなく、神様を自分に仕えさせようとする、信仰を利用して自分の名誉や権力のために使おうという誘惑を最後に強調しているのではないかと、感じます。

さて、このような誘惑の問題に対して、わたしたちは、どのような心構えが必要なのでしょうか。

その答えは、やはり荒れ野の40年を過ごした、モーセの言葉に聞くのがいいのではないか、と思います。

申命記8章2節から3節

「あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」

わたしたちは、日ごろからしばしば貧しさや豊かさのため、そして自分の名誉欲のために誘惑、試練をうけます。これらが起こって、神様から遠のいたり、神様を利用しようとしてしまう時、わたしたちは、その出来事を、これは訓練だと考えたい。自分が神様によって生きていること、生かされていることに気づくための訓練なんだ、と受け止めることが必要なのだらうと思います。

貧しさと豊かさの誘惑については、旧約聖書の箴言の中に、それを警告した、面白い言葉があります。『二つのことをあなたに願います。わたしが死ぬまで、それを拒まないでください。むなしいもの、偽りの言葉を／わたしから遠ざけてください。貧しくもせず、金持ちにもせず／わたしのために定められたパンで／わたしを養ってください。飽き足れば、裏切り／主など何者か、と言うおそれがあります。貧しければ、盗みを働き／わたしの神の御名を汚しかねません。僕のことを主人に中傷してはならない。彼はあなたを呪い、あなたは罪に定められる。』（箴言30：7～9）

もうひとつ、名誉欲のこと。数年前。「天国はほんとうにある」という映画を見たことがあります。臨死体験で天国を見た少年の話ですが、その父親である教会の牧師は、映画の最後頃、教会の礼拝で、大変感動的な説教をしました。こんな説教です。

「神は私を牧師になるように導いた。神は私を英雄にしたかったのではありません。それは私が望んだことだ。神の計画は違う。神は私のプライドを砕き、広い心を与えて、愛へと導いた。私の使命は一つ。それは愛を持って伝えること。『人は孤独ではない、と』」

自分を立派にするために神様を利用しようというのは、決してその人を幸せにはしません。いつも自分の立派さを脅かす存在が出てくるのを恐れるのです。ちょうどヘロデ王が新しいユダヤ人の王の出現を恐れるように。

しかし、クリスチャンが目指すこと、と言うより、人間が目指すことは、人々がともに支えあって生きていることを実感し、孤独な人々を仲間に入れて、打ち解けて生活することです。

そのための大斎節。そのためのクリスチャン生活だと思って過ごしたらどうでしょう。教会の仲間は信仰の競争相手ではありません。お互いをいたわりあい、支えあえるように成長することを目指してこの大斎節を過ごしたいと思います。